

焼け跡考古学

戦争が終わった。昭和二十年八月十五日昼のことでした。天皇陛下の放送は家はラジオがないので、階下の畳やさんのお店に集まってみんなでききました。大人たちはみんな泣いていました。でも、ほっとした雰囲気もあったようです。その夜から電灯の覆いがとられ明るくなりました。二、三日すると大変な混乱がやって来ました。米軍が上陸してくると、若い女性が襲われたりするとか、いうものです。何処かでは女の人も坊主頭にしたとか、田舎に疎開したとか噂もとびました。一方、空にはB二九が飛び、落下傘を落として行きます。今度は爆弾や焼夷弾ではなく食料品やお菓子がいっぱいだったドラム缶だということです。遠くに落ちるのが見えると自転車で追いかけて行く人もいます。でも、近所にはなにも落ちてはきませんでした。そんな混乱の中、学校もないので、僕は栃木県の集団疎開先に戻ったのです。そして、十月になってから、みんなと一緒に東京に帰ったのです。東京は食べ物がなくて、大変だろうと土地の人たちが、みんなに米一升とサツマイモを持たしてくれました。赤羽までは汽車で、そこからは打林さんのお父さんの会社のトラックの荷台にのって早稲田まで帰りました。しかし、二人の友達は何戦で家も家族もなくなり、身の振りかたが決まるまで、寮に残りました。僕たち下級生が散々いじめられた某君ともう一人でした。別れるときの彼らの目を、今でも忘れることが出来ません。その後、彼らはどうなったのか聞いたことはありません。

戦中、戦後の話のなかに、集団疎開の話が必ずでるが、我々の行った上三川町はいちばん恵まれていた方だと思えます。代用食とはいえ、当時としてはまともな食事を三食食べていたのだから・・・

淀橋区の戸塚第一、第二国民学校が割り当てられた群馬県の草津温泉や世田谷区の学童たちの長野県浅間温泉などで、すごした友達に食料不足でずいぶんつらい思いをしたらしい。もともと、火山灰地で農業の非生産地で食料は地元の消費も賄えない所へ大勢の子供たちが押しかけたのだから、大変だったらしい。農業組合の倉庫へドロボーに入ったり、畑ドロは日常茶飯のことだったようだ。皇后陛下の「御歌」や「お山の杉の子」や「加藤隼戦闘隊」「お山の杉の子」を歌っても腹はくちくならなかったのです。

あちこちの駅前には闇市がたち、「林檎の歌」が町に聞こえるようになりました。ラジオからは「カムカムエブリボデイ」が流れていました。集団疎開から一緒に帰った仲間が中野に住んでいて、何度も遊びに行きました。駅前から南北にズット闇市が続く大きな町でした。芋で作ったお菓子や飴、海産物が山のように積まれて売られていました。なかには「鉄カブト」を改造したお鍋や、「煙草巻き機」「パン焼き機」もありました。早稲田小学校の焼けた教室に裸電球をぶら下げて、にわか作りの「英語教室」が「喜久井町青年会の人たちの手で始めました。早稲田では焼け残った映画館のまえに行列ができ、子供たちは野球に夢中になりました。手作りのグローブ、ミットは布製、バットは焼け跡の材木から削りました。道路を通る車はほとんどなくて格好の野球場になりました。夏はそれに水遊びが加わります。早稲田中学や早稲田高等学院のプールが扉もなく泳ぎ放題でした。チツチャな一年坊主までが器用に六尺ふんどしをむすび、水換えをしていない緑色の水の中をはね回りました。誰にも教わらず「犬かき」から泳ぐことを覚えます。学校は国民学校から小学校に名前が戻りましたが、何も急には変わりません

でした。戦災で焼けてしまった、鶴巻、山吹小学校の子供たちも一緒に、焼け残った教室での授業でした。小さな理科準備室での授業で男女別のクラスはどちらも超満員でした。疎開先から東京に戻った子供、朝鮮、満州からの引き上げの人たちで毎日のように、転入生の紹介があります。授業が午後まである日は弁当を持って行かねばなりません。小さな弁当箱にサツマ芋が二本とか、雑穀入りのご飯に梅干し一つとかの弁当でした。それも持って来られず校庭の片隅でポツンとしている子供が何人かいました。自分の弁当を少し、他人からも半分取り上げて分けたことが見つかり、先生からイヤという程、殴られたことがあります。「自分の弁当だけが取り上げられた」と親に言いつけたバカがいたので。集団疎開に行つて家が戦災にあった子供と引き揚げ者の子供にはなにかの特配がありました。(家が焼け残った高田町の手塚恭一君にはありませんでした。) なかに鮫皮製のランドセルがあり、これを背負つて学校に通いましたが、雨が降ると生臭い臭いがするので、往生しました。自身の教科書は現在の朝刊のような物が配られ、家で切り離して、姉たちに綴ってもらったものでした。四年生になったとき、「国のはじめ」という本が配られました。これが製本された教科書のはじめでした。男、女一組ずつの学級が男女共学の三組編成になりました。一緒に集団疎開に行つた長沖 学、飯塚幹男や瑞穂学寮にいた手塚恭一と同じクラスで四年二組でした。授業が終わると、教室の掃除のほか、焼けて駆体だけになつてしまつた校舎の土砂や灰を片づける作業もありました。小さな手でスコップを握り、焼けトタンに載せ、数人で引つ張つて裏庭に捨てに行くのです。大黒屋の青山とか、河合洋一郎など身体の大きな連中はこれを「ガイコツ列車」とよんで、戻るときには、小柄な井上とか武中をのせて、半分楽しみながらやっていました。家にかえるとランドセルやカバンを放り出して道路で野球、でもたいていは三

角ベースでした。(早稲田通りでも三〇分に一台自動車を通る位でした。)

プロ野球も始まり、セネターズやドラゴンズ、ジャイアンツが強く、大下や川上、藤村といった選手がホームランキングを争っていました。でも、子供たちは身近に練習を見られる早大野球部の選手のほうが人気がありました。岡本、宮原のバッテリーやシヨートの蔭山が中心でした。「紅梅キャラメル」が売り出されて、巨人の選手の写真カードがオマケについて、プロ野球選手が人気者になるのは、それより後のことになります。闇市の芋飴からキャラメルやチョコレートに変わったのでした。この頃、カバヤ(カバヤ文庫のオマケつき)とかフルヤのウィンターキャラメル、明治クリームキャラメルというのが人気商品でした。朝、登校すると勉強道具を放り出して「水雷艦長」や「馬跳び」に熱中して、鐘が鳴っても教室に入るのを忘れて担任の「満開デボン」になぐられたことも、何度もあります。学校から帰るとカバンを投げ遊びに外に出ます。家にいると「早く遊びにいきなさい。」と親に云われるのです。天気が良い日は外で遊ぶのが当たり前でした。「ワアア」と叫び棒をふりまわして「東山三十六峰」や宮本武蔵に夢中になりました。魚つりに夢中になった時期もありました。最初は甘泉園や大隈庭園の池で、でもここは「クチボソ」とか「たなご」しか釣れないので、牛込見附に行き、また都電に乗って州崎の方まで行くようになりました。お年玉をためた二十円で釣り竿や餌箱を買つてです。永代橋際には米軍のフリゲート艦が一隻係留していて、乗組員が真っ白い制服でキビキビ動くのを電車の中から見ながら行きました。「セイゴ」とか「ハゼ」がとても、良く釣れたのです。あるとき、もつと先の砂町まで足をのびました。あまり釣れるので夢中になり、帰りの電車賃と餌をいれた餌箱を満ち潮に流してしまい、小林の盛坊とふたり、トボトボ歩いて帰つたこともあります。薄暗くなった日本橋あたりで、

知らない小父さんから一円もらって、パンを買い、電車に乗ってヤット家にたどりついたのです。このときばかりは、いつも「外で遊んでおいで」「家にばかりいるんじゃないヨ」という両親も夕飯も食べずに心配してくれていました。でも、すぐ往復ピンタが飛んできました。この頃、どこの家も狭く、家族が多くて母親は忙しいので、子供たちを外に追い出していたのだろう。町の気のいい小父さん、小母さんたちに見守られて子供たちは育ったのです。自分の目が届かなくても、「世間様」が守ってくれる、そういった連帯感が町にも村にもあったのです。家でコンピュータゲームやテレビに夢中になり、外では「知らない人について行ってはいけない。話をしてはいけない。」といわれ、運動不足でスポーツクラブやプールに親に送り迎えされて通う現代の子供たちとどちらが幸せなのだろうか。いま一番不足しているのは、「世間様」なのではないでしょうか。

この年の秋、オドール監督が率いる「サンフランシスコ・シールズアメリカ」の野球チームがやって来ました。いくつかのプロチームが対戦しました。人気打者とのホームラン競争もありました。スケジュールの最後に「東京六大学選抜チーム」との対戦があり、都内の子供たちが招待されました。早稲田小学校では校内の抽選で、幸い僕もあたり、親からなにがしかの小遣いをもらって出かけました。後楽園球場の高い観覧席で目のくらむ思いをし、生まれて初めて「ホットドック」を食べ辛子の辛さに目をまるくしました。残りのお金で飲み物を買いました。ヒョウタンに似た形をした重い瓶に入った、薬くさい、ガスの強い黒い液体で「コカ・コーラ」という名前でした。この日、早稲田の選手が活躍しましたが、それよりも食べた、飲んだらしたことの影響が強烈でした。

学年が進むと少し離れた遊び場に行くようになりました。水稲荷の境内や富士山や穴八幡も格好のチャ

ンバラの舞台になりました。スコットホールには広い場所があつて野球や「カクレンボ」「水雷艦長」を良くやりました。自転車の練習もここでした。子供用の自転車などなくて、自転車屋の佐藤君の大人用を交代で乗ったのです。これに三角乗りで乗るのですが、チョットしたコツがあり、うまく乗れるまではたいへんでした。敷地のなかにレンガ建ての教会や寄宿舎、宣教師館が芝生にかこまれてありました。白いペンキで塗られた垣根のなかに別世界のようにでした。日曜学校というのも、やっていて楽しそうだったので、ワルガキ共は連れだつて行くようになりました。「高橋のモモチヤン」とか「野口のかほちゃん」とか上級の女の子の多いところでしたが「神さま、のきの小雀まで」の賛美歌を歌い、大学生のお兄さんやお姉さんの話を聞いたあとチョップピリお菓子やカードが貰えるのが楽しみです、子供たちは神妙な顔して毎日曜日通つたものです。クリスマスには見よう見まねで劇をやり、サンタクロースもやって来て、プレゼントを貰いました。宣教師は若はげで眼鏡をかけたフリデールという人で、日本語が上手でした。奥さんと小さな子供が二人いて、クロスレーという小さな車で出かけて行くのが常でした。みんなは陰で「フリさん」と呼んでいます。「今度、子供のカンバセーションのクラスを始めます。」とその「フリさん」の家に呼び込まれました。初めてサンドイッチを食べたいを「馳走になりました。でもトイレはとんでもない物でした。「オシッコでないゾ」といって木村君が飛び出してきました。「みんな、ついて来なさい」フリさんにゾロゾロついて行きました。「オシッコはこう、ウンチはこうして座つて」と教えてくれます。「やつてごらん」と云われ、木村君は泣きそうな顔をしていました。「カンバセーション」は「カムカムエブリボデイ」と異なり、サッパリ分からないけど楽しい時間でした。ふわふわの絨毯とアラジンのケロシンストープで暖かいすてきな世界でした。「フリさん」

の都合の悪い日は奥さんや「リーパー」が代わりの先生でした。

中学生になると勧められて美土代町のYMCAの英語学校に行くようになりました。ここには 林馬太男という大きな声で授業をすすめる先生がいました。YMCAはエレベーターもある大きな建物で地下に室内プールや体育館もあり、授業の後をここで過ごすこともありました。プールは何故か、「フレンチン」で泳ぐ決まりがありました。ある日、林先生がバックで泳いでいるので鏝君がプールサイドを走ってゆき「林先生、人並みダゾ」と手柄顔で戻ってきました。スズラン通りの小さな古切手店とか大きな店構えの模型店、本屋の東京堂、三省堂とかに出入りして、わずかな小遣いをにぎりしめて、上手に使うこともおぼえました。早稲田奉仕園には相変わらず通い、拙い英語でベニンホフ、ライシヤワールさんのことを学び、スコットホールの由来も聞くようになりました。高校に進み二年生になった頃までそんな生活が続きました。夏休みにはイングリッシュ・キャンプと言って英語で生活する合宿もありました。行き先は横濱の六浦湾に面した関東学院大学の寮や観音崎のキャンプ場でした。観音崎はプライベート・ビーチみたいになっていて、午後はここで泳いですごすのです。沖のフロートまで競争で泳ぎます。早くついて後から泳ぎつく女子を引き上げるのです。このとき水着の中が一瞬みえ、胸をときめかせたりしました。

昭和二十年代の後半 都内の室内温水プールは YMCAとお茶の水のYWCAの二つしかなかった。YMCAのプールは米軍関係者も使用、日本人は衛生状態がよくないと水着をつけさせなかったのです。

林 馬太男先生はその後、早稲田実業でも教えられた。ご両親が熱心なクリスチャンだったとお聞きしたことがある。馬太は一二使徒のматыのこと、しかし「ハヤシ 馬なみに太い男」とよんでいました。

リーパーさんは北海道へ途上、洞爺丸でご家族全員亡くなっております。

日本の洋式トイレ元年（昭和三十八年）より十数年前の話です。この年、公団住宅に採用されて普及していった。

高校でラグビー部や山岳班にはいった僕は勉強そつちのけで走り回りました。それでいて、中間試験や期末試験の最終日には映画にもよく行きました。一年生のホームルームの時間に「陽のあたる場所」をみた頃から、すっかり洋画ファンで日活テツペン座に行きます。二本立てで四十円だったと思います。大勢で行くのだが、勉強家の天野、長 とかはいつも途中で抜け出して帰って勉強しているとの噂で、事実明るくなってみると顔を見たことはありませんでした。「フレンチカンカン」「波止場」「ヘッドライト」なんか、この頃見たのだと思う。フランス名画週間もあって「パリの屋根の下」とか「望郷」など戦前の映画が上映されることもありました。昼休みにラグビーの練習のない日は、渡辺幸男に誘われて「オンチ会」の仲間と「バルカンの星の下」「カチューシャ」とかの唄を屋上で歌うこともありました。ごく稀に新宿で外食する機会があると、きつとカレーを食べました。「一人で食べる時は最高の、大勢で食べる時は最低の西洋料理・・・」とかいいながら、よく食べました。中村屋のインドカレーやドイツ風レストランの「エッセン」のカレー、ここは福神漬のかわりに生野菜がついていた。インド人が経営しているという「ナイル」にもゆきました。

学校では授業で池田 潔の「自由と規律」を読ませたとはいえ、あれをしてはいけなとか、これは

駄目とかは、メツタに云われませんでした。先生たちは新制高校の生徒たちをどう扱って良いのか迷っているのではないかと思えるほどの自由放任主義でした。親たちが叱言をいうことも少なかった。「今日は遅いネ、勉強しているかネ」と訊ねるのはむしろ、ご近所の人でした。

路地で遊ぶ子供には子供の、高校生には高校生の社会があつて、それぞれの社会の規律が自然にあつて、その中で育っていくのが当たり前の世界だったので。年上の子、年下の子が入り乱れて遊ぶうちに、小さい子をいたわることや規律、秩序を学んでいったのです。

あの頃、親たちも教師たちも、子供が自分たちの目の届かない所にいても、世間様がみてくれているという信頼と安心感をもっていたようだ。子供時代から自然に覚えた遊びも、泳ぐことも父兄が同伴してお金をかけて覚える子供たち。世相が変わってしまったこともあるが、幼稚園の頃から「知らない人とお話してはいけません。」と教えられる現代の子供たち、年の違う子供とは遊んだことがない子供たち、彼らはいま本当に幸せなのだろうか。日本全体が高度成長のなかで大事なものを忘れてしまったのではないだろうか。

日本中が高度成長や規制緩和とかいって新幹線と高速道路の代償に駅前商店街や路地がなくなり、年寄りがあるいて買い物に行けない、子供たちが「お使い」にもゆけない、子供の遊び声の聞こえない町になってしまった。もともと、小さな島国に人が大勢住んでいる国なのだから、日本には日本なりの制度が残っているのではないかと思う。大規模なショッピングセンターやスーパーマーケット、コンビニだけで人々の生活や心を賄えるものではありません。

子供を育てる環境もすっかり、変わってしまった。超高層の二〇階とか、三〇階のマンションに住む

の都合の悪い日は奥さんや「リーパー」が代わりの先生でした。

中学生になると勧められて美土代町のYMCAの英語学校に行くようになりました。ここには林馬太男という大きな声で授業をすすめる先生がいました。YMCAはエレベーターもある大きな建物で地下に室内プールや体育館もあり、授業の後をここで過ごすこともありました。プールは何故か、「フルトン」で泳ぐ決まりがありました。ある日、林先生がバックで泳いでいるので鏝君がプールサイドを走ってゆき「林先生、人並みダゾ」と手柄顔で戻ってきました。スズラン通りの小さな古切手店とか大きな店構えの模型店、本屋の東京堂、三省堂とかに出入りして、わずかな小遣いをにぎりしめて、上手に使うこともおぼえました。早稲田奉仕園には相変わらず通い、拙い英語でベニンホフ、ライシヤワーさん達のことを学び、スコットホールの由来も聞くようになりました。高校に進み二年生になった頃までそんな生活が続きました。夏休みにはイングリッschuss・キャンプと言って英語で生活する合宿もありました。行き先は横濱の六浦湾に面した関東学院大学の寮や観音崎のキャンプ場でした。観音崎はプライベート・ビーチみたいになっていて、午後はここで泳いですごすのです。沖のフロートまで競争で泳ぎます。早くついて後から泳ぎつく女子を引き上げるのです。このとき水着の中が一瞬みえ、胸をときめかせたりしました。

昭和二十年代の後半 都内の室内温水プールは YMCAとお茶の水のYWCAの二つしかなかった。 YMCAのプールは米軍関係者も使用、日本人は衛生状態がよくないと水着をつけさせなかったのです。

林 馬太男先生はその後、早稲田実業でも教えられた。ご両親が熱心なクリスチャンだったとお聞きしたことがある。馬太は一二使徒のматыのこと、しかし「ハヤシ 馬なみに太い男」とよんでいました。

リーパーさんは北海道へ途上、洞爺丸でご家族全員亡くなっております。

日本の洋式トイレ元年（昭和三十八年）より十数年前の話です。この年、公団住宅に採用されて普及していった。

高校でラグビー部や山岳班にはいった僕は勉強そつちのけで走り回りました。それでいて、中間試験や期末試験の最終日には映画にもよく行きました。一年生のホームルームの時間に「陽のあたる場所」をみた頃から、すっかり洋画ファンで日活テツペン座に行きます。二本立てで四十円だったと思います。大勢で行くのだが、勉強家の天野、長 とかはいつも途中で抜け出して帰って勉強しているとの噂で、事実明るくなつてみると顔を見たことはありませんでした。「フレンチカンカン」「波止場」「ヘッドライト」なんか、この頃見たのだと思う。フランス名画週間もあって「パリの屋根の下」とか「望郷」など戦前の映画が上映されることもありました。昼休みにラグビーの練習のない日は、渡辺幸男に誘われて「オンチ会」の仲間と「バルカンの星の下」「カチューシャ」とかの唄を屋上で歌うこともありました。ごく稀に新宿で外食する機会があると、きつとカレーを食べました。「一人で食べる時は最高の、大勢で食べる時は最低の西洋料理・・・」とかいいながら、よく食べました。中村屋のインドカレーやドイツ風レストランの「エッセン」のカレー、ここは福神漬のかわりに生野菜がついていた。インド人が経営しているという「ナイル」にもゆきました。

学校では授業で池田 潔の「自由と規律」を読ませたとはいえ、あれをしてはいけなやか、これは

駄目とかは、メツタに云われませんでした。先生たちは新制高校の生徒たちをどう扱って良いのか迷っているのではないかと思えるほどの自由放任主義でした。親たちが叱言をいうことも少なかった。「今日は遅いネ、勉強しているかネ」と訊ねるのはむしろ、ご近所の人でした。

路地で遊ぶ子供には子供の、高校生には高校生の社会があつて、それぞれの社会の規律が自然にあつて、その中で育っていくのが当たり前の世界だったので。年上の子、年下の子が入り乱れて遊ぶうちに、小さい子をいたわることや規律、秩序を学んでいたのです。

あの頃、親たちも教師たちも、子供が自分たちの目の届かない所にいても、世間様がみてくれているという信頼と安心感をもっていたようだ。子供時代から自然に覚えた遊びも、泳ぐことも父兄が同伴してお金をかけて覚える子供たち。世相が変わってしまったこともあるが、幼稚園の頃から「知らない人とお話してはいけません。」と教えられる現代の子供たち、年の違う子供とは遊んだことがない子供たち、彼らはいま本当に幸せなのだろうか。日本全体が高度成長のなかで大事なものを忘れてしまったのではないだろうか。

日本中が高度成長や規制緩和とかいって新幹線と高速道路の代償に駅前商店街や路地がなくなり、年寄りがあるいて買い物に行けない、子供たちが「お使い」にもゆけない、子供の遊び声の聞こえない町になってしまった。もともと、小さな島国に人が大勢住んでいる国なのだから、日本には日本なりの制度が残っているのではないかと思う。大規模なショッピングセンターやスーパーマーケット、コンビニだけで人々の生活や心を賄えるものではありません。

子供を育てる環境もすっかり、変わってしまった。超高層の二〇階とか、三〇階のマンションに住む

ことも、珍しくない。地上は、雨が降っているのか、天気なのかも、良くわからない所に暮らして、大人も子供もすっかり、出不精になってしまふ。家族全体が引きこもりがちになってしまふといひます。こどもが「引きこもり」になってしまふ。塾やお稽古ごとでいそがしい子どもたちは外で遊ぼうともしない。遊びの集団としての、子どもの集団は日本から消え失せてしまった。年齢の異なる子どもたちが一緒に駆け回る、姿も歓声もきえてしまった。若者たちの四人にひとりには派遣やフリーターで低所得、農村では米以外の農作物は国際化の名のもとに切り捨てられてしまつて農家は購買力がなく、町の商店も地方の商店街も総潰れの現状です。日本は長期的な目で再構築して行かなければならない時期にきているのでは、ないだろうか。一五年戦争中のように、外国から油も、足らない食料品、生活必需品が入って来なくなつたら、どうなるのでしょうか。国際分業などとかっこいいことは、言えなくなります。